

「自由と決定論」

私は自由であるのかという問題は、古来、決定論との拮抗のもとで広く論じられてきた。私たちは、己の自己決定によって自分の行為をかくあるように設定していると日常的に考えている。そして、自分の決定によって特定の行為をなすことが自由の要件であるとみなしている。それゆえまた、自分が決定したのだからこそ、ある行為の責任を、他の人ではなくまさに私が負うべきだ、と考えてもいる。このように、私が自由であるということは、私が自己決定に基づいて行為し、その責任を自身に帰属させるのだという確信を、必然的に伴っている。このことは一見揺るぎないように見えるが、決定論はこの自由の確信を正面から否定する。すなわち決定論によれば、自然科学的な見方からして、この世界は自然法則の因果性によってあまねく決定されており、人間の行為もまた自然法則に支配された世界の流れの一部にすぎない。ところで私の自由な自己決定は自然法則の因果性を変更することはできない。したがって、私の行為が自由であるという確信は誤謬であるということになる。

だが、決定論によるこの反論はそう簡単には受け入れられない。なぜならば、犯罪行為にせよ、功績的な行為にせよ、私たちは日常的に個人に行為の責任を問うており、そうした帰責を手放すことは不可能であるように思われるからだ。ならば、世界の事象ならびに人間の行為は自然法則によってすべて決定されているという決定論が間違っているのか。それとも、私たちの自由に関する考え方が間違っているのか。あるいは、決定論と自由は両立しうるのか。このような問いが自由と決定論のもとでさまざまに論じられてきた。

本レクチャーでは、第一に、以上のような決定論と自由の両立可能性に関する議論の基本枠組みを理解すること、第二に、この枠組みを踏まえ、既存の自由意志論における主要な問題ならびに発展的議論を発見すること、第三に、哲学史上の自由意志論の発展の系譜を見通す機会としたい。